

RILAC NEWS

No. 14

2015 / 3

公益財団法人荒川区自治総合研究所
(Research Institute for Local government by Arakawa City)

第4回 荒川区自治総合研究所 区民フォーラム みんなでつくる幸せのまち —荒川区民総幸福度 (GAH) 向上の取り組み—

平成26年12月8日(月)、サンパール荒川小ホールにて、第4回区民フォーラム「みんなでつくる幸せのまち—荒川区民総幸福度 (GAH) 向上の取り組み—」を開催いたしました。

第4回を迎えた区民フォーラムでは東京大学名誉教授 月尾嘉男氏を講師に迎え、「地域から実現する幸福・幸福社会への巨大転換」と題して基調講演を頂きました。

その後は、学校法人聖学院理事長・院長 阿久戸光晴氏をコーディネーターに、基調講演講師の月尾嘉男氏に加え、荒川区医師会会長 富田崇敏氏、千葉大学教授 広井良典氏、荒川区自治総合研究所理事長で特別区長会会長・荒川区長 西川太一郎をパネリストとしたパネルディスカッションを行いました。



▲主催者あいさつ

パネルディスカッションでは会場との質疑の時間が設けられ、活発な意見交換が行われるなど、第4回区民フォーラムは盛況のうちに幕を閉じました。

本号では、この第4回区民フォーラムの様子などをお届けします。

◆◇ 第4回区民フォーラム プログラム ◇◇

1. 開会
2. 主催者あいさつ 荒川区自治総合研究所理事長・荒川区長 西川太一郎
3. 来賓あいさつ 荒川区議会議長 北城 貞治 氏
4. 基調講演「地域から実現する幸福・幸福社会への巨大転換」
 東京大学名誉教授 月尾 嘉男 氏
5. パネルディスカッション「絆がつくる幸福な地域社会の実現に向けて」
 コーディネーター 学校法人聖学院理事長・院長 阿久戸光晴 氏
 パネリスト 東京大学名誉教授 月尾 嘉男 氏
 荒川区医師会会長 富田 崇敏 氏
 千葉大学教授 広井 良典 氏
 特別区長会会長・荒川区長 西川太一郎
6. 閉会

■ 主催者挨拶

荒川区自治総合研究所理事長・荒川区長
西川 太一郎



本日は貴重なお時間を割いていただき、荒川区自治総合研究所主催の第4回区民フォーラムにご出席くださり、まことにありがとうございます。

私からは、本日の基調講演とパネルディスカッションにおいて御登壇いただく先生方をご紹介申し上げ、挨拶の代わりとさせていただきます。

パネルディスカッションのコーディネーターとして御登壇頂きます学校法人聖学院理事長の阿久戸光晴先生は、荒川区民でもいらっしゃると思います。このまちで育って、区の小学校を経て、区内の中学、高校から一橋大学に進まれました。その後、アメリカ留学を終えられて、聖学院大学の学長を経て、今日までご活躍であります。基本構想の策定の際には審議会の座長にご就任いただき荒川区の目指す「幸福実感都市」の「6つの都市像」をおまとめいただくなど、これまでも様々な御貢献を頂いております。

また、私が平成16年に区長に就任した時、「区政は区民を幸せにするシステムである」という荒川区のドメイン（仕事の領域）を定めました。

研究所の理事であり所長であります二神恭

一博士からは、何事も仕事を行うについては、みんなが理解でき、何をどうやって、誰に配っていくのかを明確にしなければいけないとお教えいただきました。そこで私は、1,500人の職員が一丸となって、区民の皆様には幸福を、切れ目なく、組織的にお配りしていくような行政ができたらと思い「区政は区民を幸せにするシステムである」という区政のドメインを定めたという次第です。

そして、幸せというものをどういう風に行政に結びつけていくかを私に教えて下さいましたのは、名古屋大学、東京大学で教鞭をとられ、総務省総務審議官としてもご活躍された、東京大学名誉教授の月尾嘉男先生です。

ある時、月尾先生が私に、人口70万人のヒマラヤの国ブータン王国では、先代のジグミ・シンゲ・ワンチュク国王の下、開発優先の経済発展ではなく、国民の幸せを最大化することを国家目標として追求しているということをお教え下さいました。

私どもは、区民の皆様には幸せを実感してもらうためにはどのような区政を行えば良いのだろうかということを考え、それを阿久戸先生にご相談申し上げた結果が先ほど申し上げた6つの都市像でございます。

また、月尾先生からは、幸せというのは極めて主観的なものであり、こうだと定義するのはなかなか難しいけれども、まずは不幸な人を減らすことが重要ではないか、というご教示をいただきました。

そこで、大変すぐれた学識をお持ちで、千葉大学で教鞭をおとりになっている広井先生にご相談を申し上げました。広井先生は厚生省にも勤務されておりましたので、福祉の分野やコミュニティの分野等で、どうすれば区民の皆様にお幸せになっていただけるかを一生懸命ご指導いただいております。

広井先生に荒川区までお出ましいただいた

回数は、10本の指では足りないぐらいで、時には職員に講義をしていただき、時には区民の皆様にご講演をいただいたりしてまいりました。また、ご一緒に座談会をさせていただき、その様子を新聞に掲載していただいたこともございました。

最後になって恐縮でございますが、富田荒川区医師会会長は、実はある日、私のところにご連絡をくださって「荒川区民総幸福度(グロス・アラカワ・ハッピネス:GAH)」、これに自分は医師会会長としてではなくて、一区民として非常に興味がある、手伝いたいと、こういう風におっしゃっていただきまして、先生のご発案をもとに荒川区民総幸福度(GAH)推進リーダー会議というものをつくらせていただきました。

GAH推進リーダー会議には今、大勢の方にご参加をいただいています。恐らく、今日ここにも大勢のGAH推進リーダーの方々が、先生方のご講演を楽しみにご出席いただいているのだと思います。

区民の幸福実感を向上させようという「荒

川区民総幸福度」の取り組みからは、「幸せリーグ」という新たな取り組みも生まれました。

「幸せリーグ」は、全国の自治体が、みんなで自分のまちの幸福を実現するための政策を考え議論する場であり、全国から60を超える自治体(平成26年12月8日現在)が参加しています。こういう議論の場をつくろうとしてから、もう足かけ3年になろうとしています。後ほどもし機会があればもう少しお話をさせていただきたいと思いますが、今後もこうした活動を一生懸命に充実させながら、日本を基礎自治体からしっかり支えていこうと、我々小さな力ではありますが、考えている次第です。

以上、大変雑駁なご挨拶でございますが、後ほどパネラーとして再度耳を汚すことになりますので、今日はこのように、先生方のご紹介を申し上げることで開会の挨拶とさせていただきます。

重ねてお寒い中、ご参加をいただきました皆様に心より御礼を申し上げます。

「幸せリーグ」とは

平成25年6月に荒川区が発起人代表となって設立された、住民の幸福実感向上を目指した基礎自治体連合(通称「幸せリーグ」)(会長西川太一郎荒川区長)です。

住民の幸福追求という同じ志をもった基礎自治体同士が、互いに学び合い、持てる力を結集して行政運営の一層のレベルアップを図るため、実務者会議など様々な取り組みを行っています。

平成26年4月には幸せリーグ設立の意義や、今後の展望、参加自治体の特色ある施策等を掲載した書籍『「幸せリーグ」の挑戦』を公開しています。



絶賛発売中！
『「幸せリーグ」の挑戦』
荒川区自治総合研究所編
三省堂
平成26年4月刊行
定価900円＋税

■ 来賓挨拶

荒川区議会議長
北城 貞治 氏



第4回目を迎えられます区民フォーラムにお招きありがとうございます。本当にありがとうございます。区議会を代表いたしましてご挨拶を申し上げます。

ご挨拶をさせていただく前に一つご報告を申し上げます。本年（平成26年）、全国71の市議会が荒川区に視察にお見えになりました。そのうちの15の市議会は県庁所在地の市議会であります。さまざまな分野の視察がありますが、そのうちの16が自治総合研究所関係でございました。もちろん荒川区議会としまして、丁寧な対応をさせていただき、間違いなく荒川区に素晴らしい印象を持たれてお帰りになりましたことを、この席をお借りしまして、ご報告申し上げる次第でございます。

今日のテーマは「荒川区民総幸福度」であります。あくまでも私見でありますので、恐らく間違いがあるかと思いますが、お許しを願いたいと思います。

自治総合研究所が行っている「荒川区民総幸福度」の研究活動には3つの視点があると私は思っております。1つの視点は、何が幸せであるかという視点でございます。これらを執行機関、そして議会が的確に把握する

ことによりまして、より具体的に、より効果的に政策が構築できると思っております。

もう1つの視点、それは自分自身が幸せを享受し、そして幸せな地域社会を形成するためには、自分で何ができるかという視点でございます。幸せな地域社会を形成するためには、行政だけの力では到底できません。ましてや、幸せは行政から得るものでもございません。ここにお集まりの方々のように、積極的に地域社会を支えることに喜びを感じ、公に尽くすことに使命感を感じる、そういう方々の輪が広がれば広がるほど幸せな地域社会が形成されると思っております。これが2つ目の視点であります。

そして、3つ目の視点は、これらの研究活動を通じまして、荒川区政に携わる全ての人たちが区民の声を自分自身の肌で感じ、区民の幸せのために区政運営ができることを自覚し、そして誇りに持つことであろうと、こんなふうに思っております。

荒川区にはすばらしい財産があります。荒川区では、町会・自治会活動を通じ、またさまざまな団体活動を通じまして、支え合う地域社会の原動力である濃密な人間関係が形成されております。私ども荒川区議会、そのような団体の方々が団体活動を維持し、さらに活動できますように、あらゆる環境整備を図っていく決意でございます。

そして、同時にもう一つお誓い申し上げます。1年365日、区民の方々と直接接し、区民の方々の声を自分自身の肌で感じ、政策形成ができるのは私たち荒川区議会であると確信を持っております。この理念のもと、さらに具体的な政策提言をし、その実現を図るために全力を尽くす決意でございます。

結びに、自治総合研究所の成果をご期待申し上げます。荒川区議会を代表しましてのご挨拶とさせていただきます。

■ 基調講演（抄録）

「地域から実現する幸福・ 幸福社会への巨大転換」

講師 東京大学名誉教授
月尾 嘉男 氏

● 富と幸福

日本も世界も経済が発展すれば国民は幸せになるだろうという考え方で政治・行政を進めてきました。しかし、こうした考え方は間違っているのではないかと考えています。

1950 年から 2010 年までの 60 年間で世界経済は 10 倍近く成長していますが、人口は 2.7 倍しか増えていませんから、1 人当たりでは豊かになっているはずですが。

しかし、ある統計によると自分が幸福だと思っている人は、世界の人口のわずか 22% の 15 億人ほどにしか過ぎず、逆に不幸だと思っている人が 32 億人で、世界の人口の半分ぐらいになります。つまり、経済は豊かになったのに、幸福だと感じるよりも不幸だと感じる人のほうが多いという矛盾したことが起こっているわけです。

日本も同じように、60 年間で人口は 1.4 倍に増え、経済は 60 倍近くも発展しましたが、1 人当たりの国内生産は増加しているわけですが、幸福度を見ると、横ばいか少し下がっている状態です。

所得と幸福の関係について調査した研究によると、年収 1,500 万円ぐらいまでは所得の上昇とともに幸福度が上昇していきませんが、そこから先は所得が増えれば幸福度が上がるという関係にはなっていません。

また、日本は残念ながら世界で 9 番目に自殺する人の比率が高い国になっています。豊かさが幸せであるならば、自殺する人はもっと少ないはずですが。

経済は発展しているのに、なぜ多くの人が



それほど幸福だと思っていないのか。それは一言で言えば、配分に問題があるということです。

● 格差の拡大

世界では大体 10 億人が栄養不足の状態にあり、約 1,000 万人の人が飢え死にしています。一方、食べ過ぎて困っている人は 11 億 5,000 万人もいます。食糧の配分に問題があるのです。

社会の所得配分を表す指標としてジニ係数という数字があります。数字が小さいほど格差がない社会で、全ての人が全く平等であれば 0、一人が全ての富を独占している場合に 1 になるように計算したものです。

税金や社会保障などによる再配分後のジニ係数が時間的にどのように推移しているかを、アメリカ、イギリス、フランス、中国、日本の 5 カ国について調べますと、おおよそ、どの国もジニ係数が次第に増えていっていることが分かります。つまり配分が不平等の方向に進んでいるのです。

中国は世界一の格差社会であり、再配分後のジニ係数が 0.6 です。大体 0.3 を超えると社会不安が始まり、0.4 を超えるといつ暴動が起きてもおかしくないと言われますが、それをはるかに超えています。中国には 13 億の人がいますが、その内の 10%、つまり

1 億 3,000 万人の金持ちによって国の富の 3 分の 2 が占められています。

アメリカのジニ係数も年々上がっており、5% の上位の金持ちによって国民全部の家計資産の 6 割が占められています。フランスは多少良いのですが、10% のお金持ちが全体の 22% の富を得ています。

日本はそういう意味では模範的な国で、7% のお金持ちが全体の富の 7% 程度を持っているという、ほぼ比例した状態になっています。

その日本も、残念ながら時間的に見るとだんだんと格差社会になってきております。1980 年頃からジニ係数が緩やかですが上がり始め、社会保障や税制で補正していますが、少しずつ格差が大きくなっています。実際、相対的貧困率も緩やかですが上昇しています。必ずしも格差のない平等な社会とは言えない状況にあることが分かります。

●等しからざるを憂う

「人は貧しきを憂えず、等しからざるを憂う」という言葉があります。つまり、不平等があると、世の中が乱れるから、為政者は平等な社会をつくりなさいというわけです。

そういうことを考えると、これまでの GNP（グロス・ナショナル・プロダクト 国民総生産）至上主義はそろそろ破綻しているのではないかと思います。経済が発展してきたのに、世界でも日本でも多くの人が不満を抱えている。そろそろ社会の目標を変えようということが出てきたのが「幸福」という概念です。

●幸福を目指して

1976 年、当時のブータンのジグメ・シンゲ・ワンチュク国王が、GNH（グロス・ナショナル・ハッピーネス 国民総幸福量）は GNP よりもはるかに重要であると言われました。

国王は、人々の幸福な生活を可能にする基盤である自然環境や精神文明、文化伝統、歴史資産を壊してまで、また家族や友人や地域社会の絆を壊してまで、経済成長を目指すのは決して国家のすべきことではないと、画期的なことを言われたわけです。

1976 年という年は、オイルショックからまだ数年たっただけの年でしたから、世界各国は経済を発展させようと考えていた時代ですから、当時は誰も理解できなかったような言葉でした。

2011 年に、私がブータンのジグメ・ティンレー首相（当時）に、幸福とはどういうことですかとインタビューしたところ、いかにして物質主義と精神主義の均衡を維持するかが幸福を達成するために大事なことだと言っておられました。

その意味では、日本人は確かに以前からブータンと同じ方向を目指しております。総理府、内閣府が長年行ってきた調査では、年々、物の豊かさよりも、心の豊かさを重視すると答える人が増えています。

●幸福を測る

それでは心の豊かさ、幸福というのはどういうことかを考えてみます。

トルストイの『アンナ・カレーニナ』の冒頭には、幸福な家庭はいずれも似ているけれども、不幸な家庭はそれぞれ違うと書いてあります。私は、これはおかしいと思います。例えば、外から見ると一見幸福な家庭でも、家庭内別居などの問題を抱えているという例は多数あります。そこで私は、不幸な家庭は大体状況は似ているけれども、幸福な家庭はそれぞれ事情があるのだと考えています。例えば貧しくても、一家が楽しく生活している家庭もあれば、世間がうらやむほどの金持ちなのに満足していない家庭もあるということ

です。

幸福とはそういうものですから、当然、計算してはいけないものです。

ブータンのジグミ・シンゲ・ワンチュク国王が、幸福というのはどのようにして測るのですかと質問されたときに、5年とか10年単位で過去を振り返ったときに、自分たちの生活が向上していると多くの人が思えば幸福の程度が向上していると考えればいいのではないかとっておられます。計算するものではなく、国民それぞれが自分の生活を振り返ってよくなったと思ったらそれが幸福だということです。

ところが、経済学という困った学問があり、幸福を計算してみようという人が出てきています。

世界57カ国についてアンケートを行っている「世界価値観調査」では、「あなたは幸福ですか」と聞いていますが、1位はメキシコで、日本は30位です。

また、幸福を客観的に計算してみようという指標があります。世界の151カ国を対象にした「幸福惑星指標」です。生活満足度と平均余命を掛算し、生態学的足跡、つまり環境を破壊している度合いで割ったものです。2013年の計算では、1番幸福なのがコスタリカで、以下ベトナム、コロンビア、ベリーズと続きます。日本は45位でドイツが46位、フランスが50位、カナダが64位で、アメリカは105位になります。経済の豊かな国が必ずしも幸福ではないということが計算でも示されているわけです。

●欲望と幸福

幸福というのは自分が持っている財産を欲望で割った値と考えたらどうかと、日本の哲学者が提案しています。

欲望で割りますから、欲望が大きいほど不

幸になるし、財産が少なくても不幸になるのですが、財産が同じであれば、欲望が強いほど不幸になるわけです。

ところが困ったことに、社会には欲望を増やす仕組みが組み込まれています。

世界最初のパブル経済崩壊は、17世紀にオランダで発生したチューリップバブルと言われています。チューリップの球根1個が豪邸1軒の値段と同じ程度で取引されていたという異常な現象でした。日本でも米騒動が江戸時代に何度も発生しています。米の買い占めによって金もうけをしようとしたのです。20世紀には株への異常な投機により、1929年には有名なブラックサザデーが発生していますし、最近では1987年のブラックマンデーが発生しているように、何度も破綻が起きています。最近では、炭素本位経済が登場し、二酸化炭素を減らせない国は二酸化炭素の権利を買えというようなことまで起こってきたわけです。他国が削減した二酸化炭素を金銭で購入しても、二酸化炭素の排出が減るわけではないのに、不思議な制度が登場しています。

こういう欲望を増大していくような仕組みが存在すると、財産を増やしても欲望で割れば不幸にしかありません。

幸福になるためには、物質的な満足を満たすだけではなく、精神的、感情的、心理的に



満足するような社会を作っていかなければならないのです。

●日本の伝統を見直す

ブータンのティンレー前首相は、幸福になるためには人間社会はこれまでとは異なる生き方、異なる発展の道を選ぶ必要があると言っておられました。

また、オーストラリアの先住民族アボリジニは現代の一般的な価値観に問題があるのであれば、伝統的な社会の価値観の重要性を見直したらどうかと言っています。

そこで思い出していただきたいのは、日本は欲望を小さくして豊かになる社会を築いた世界でもまれな国家・国民だということです。これを日本人に気づかせてくれたのが韓国から上智大学に留学し、2002年には韓国の初代文化庁長官になられた李御寧（イ・オリョン）です。彼は、日本人の文化は物事を小さくしても豊かさを得る文化だと言っています。分かりやすい例は扇子です。同じ風をおおぐのでも大きな団扇ではなく、たたんで使える扇子です。盆栽も鉢植えて広大な宇宙を表現できる文化です。

日本が最も小さくしたのは茶道であると思います。千玄室大宗匠にインタビューに行ったとき、茶道の本質は何かとお伺いしたら、「それは一杯の抹茶をいただくときに宇宙を考えることだ」と言われました。分からないので、さらに質問したところ、「火、水、木、金、土という宇宙の全要素がここに集約されているからだ」という回答でした。炭火で水を湧かし、金属の茶釜で沸かしたお湯で木を材料とした抹茶を立て、土でつくったお茶碗で飲む。ここに宇宙の全てが込められているというわけです。大宇宙を一杯の茶碗に閉じ込めるほど縮小したのが日本文化の神髄だというわけです。

お客様をもてなすとき、西欧では立派な迎賓施設を建ててお招きするのですが、日本では質素な茶室で十分です。庭もベルサイユ宮殿のような広大な庭園ではなくて、小さな坪庭で広大な世界を表現します。茶室も狭いほど価値がありますし、その床の間に飾る花も一輪挿しで十分です。食事も次々と食器を変えて多数の料理を出す西欧式ではなくて、一膳の箸と重箱に詰めただけで立派なもてなしができます。おみやげも、破ってしまえばゴミになる派手な包装ではなくて、何度でも使える風呂敷に包んで渡します。

小さくしても豊かさを感じることでできる日本の縮小という精神が茶道に最も結集しているわけですが、こうした文化は日本には数多くあります。

私たちが幸福になるためには、中国の『老子』に出てくる「足るを知る」という考え方が大切です。欲望を追求していても幸福になることはありません。

満足だと思えば、そこから幸福が始まるのです。このような言葉を思い出し、幸福の先進地域、荒川をぜひ皆さんの手で実現していただければと思います。



■ パネルディスカッション(抄録)

「絆がつくる幸福な地域社会の実現に向けて」



▲会場との質疑応答の様子

コーディネーター

学校法人聖学院理事長・院長

阿久戸 光晴 氏

1951年生まれ。一橋大学社会学部・法学部を卒業し、東京神学大学大学院博士前期課程修了、神学修士。学校法人聖学院理事長・院長であり、荒川区基本構想審議会会長、荒川区自治総合研究所「荒川区民総幸福度(GAH)に関する研究会」座長を務める。専門は社会倫理学、人権・デモクラシーの倫理学。



パネリスト

東京大学名誉教授

月尾 嘉男 氏

1942年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを勤め、現在、東京大学名誉教授。幸せリーグ顧問。専門はメディア政策。最近は環境問題や先住民族の文化を研究。著書は『地球千年紀行』、『先住民族の叢智』、『地球の救い方』、『水の話』など多数。



荒川区医師会会長

富田 崇敏 氏

1945年生まれ。信州大学医学部卒業。内科・神経内科医。東京女子医大第二病院勤務を経て富田医院開業。荒川区医師会会長をはじめ、荒川区介護認定審査会会長、荒川区自立支援協議会会長、荒川区感染症診査協議会委員、荒川区国民健康保険運営協議会委員などに就任し、区の医療・福祉行政に貢献。荒川区民総幸福度(GAH)推進リーダー。



千葉大学教授

広井 良典 氏

1961年生まれ。東京大学大学院修了後、厚生省勤務を経て千葉大学法政経学部教授。幸せリーグ顧問。専門は公共政策。社会保障や環境、医療・福祉、都市・地域に関する政策研究から、時間、ケア、死生観等をめぐる哲学的考察まで、幅広い活動を行っている。著書に『定常型社会』(岩波新書)、『コミュニティを問いなおす』(ちくま新書)など多数。



特別区長会会長・荒川区長

西川 太一郎

1942年荒川区生まれ。早稲田大学商学部を卒業し、早稲田大学大学院を経て、東京都議会議員4期、衆議院議員3期(防衛政務次官、経済産業副大臣等を歴任)を務める。学術博士。2004年荒川区長に就任(現在3期目)。2011年特別区長会会長に就任(現在2期目)。2013年に発起人となり「幸せリーグ」を結成、初代会長に就任。



○阿久戸コーディネーター



お忙しいところ、大勢の皆様方のご出席に本当に感銘を受けております。

また、月尾先生の基調講演には私自身、非常に多くの示唆を与えられました。

月尾先生、本当にありがとうございます。

誰もが幸福を実感できるあたたかい地域社会を築いていくためには、地域のつながりや絆を深め、地域の力、地域力を向上させていくことが非常に重要であります。

地域力向上のための土壌をつくり、機運を高めていくためには、今後一体どのようなことが必要なのかについて、区民の皆様方をはじめとする関係者の皆様と一緒に考え、今後の荒川区民総幸福度（GAH）向上の取り組みをさらに前進させていくことを狙いといたしまして、パネリストの皆様方にご議論いただければと思います。

それでは、早速、各パネリストの先生方からご発言をお願いしたいと存じます。

なお、月尾先生につきましては先ほど貴重なお話を頂戴いたしましたので、まず広井良典先生からご発言をいただければと思います。

○広井氏



ご紹介いただきました広井でございます。皆様どうぞよろしく申し上げます。

先ほどの月尾先生のお話には大いに感銘を受けました。ですので、月尾先生のお話を荒川区の話に

つなげて考えるような発言を最初にさせていただければと思います。

月尾先生のお話にもありましたように、今、幸福というテーマに対する関心が高まっているわけでありまして、例えばスティグリッツやアマルティア・センといったノーベル経済学賞を受けたような経済学者も GDP に代わる指標ということで報告書を出しています。

幸福に関する研究や具体的な政策が現在、国内、国外ともに非常に活発になっているわけですが、私自身が1つ大事だと思っているのは、荒川区の GAH は、決してブータンの GNH の試みをただ追従するようなものではなく、独自の意味を持っているという点です。

それはローカルな所から幸福を考えるということです。

考えてみればブータンの GNH も「グロス・ナショナル・ハッピネス」ですから「ナショナル」ということで、国レベルでものを考えている。その意味では GNP つまり「グロス・ナショナル・プロダクト」と同じなわけです。国レベルではなく、地域というローカルな所から出発して、幸せというものを考えていく。これが荒川区の GAH の特徴で、世界でも先駆的な試みであると思います。

ローカルな所から幸福を考えていくという動きは、今、各地で進みつつあります。先日も熊本県の方とお話ししておりましたら、熊

本県はくまモンで有名ですけど、熊本県も「アグリゲート・クマモト・ハッピーネス (Aggregate Kumamoto Happiness)」、略して AKH という幸福指標をしばらく前から考えているそうです。

これは県レベルの取り組みですが、このようにローカルなレベルから幸福を考えようとする動きが今、各地で始まろうとしています。もう一点、幸福というのを考えていくに当たって非常に重要になってくると思いますのが、コミュニティというテーマです。

月尾先生のお話にも、伝統的なものとか古くからのものを大事にしていくことが重要というお話がありましたが、伝統的なコミュニティの価値をもう一度見つめ直すことが大切になるのではないのでしょうか。

私があえて申すまでもありませんが、荒川区は町会の活動が非常に活発な地域です。この間も荒川区の町会長さん方のお集まりに参加させて頂き、お話をさせて頂きましたが、例えば防災の意味もあって鎮守の森の植樹をしておられるとか、あるいはお年寄りのための見守りネットワークとか、緊急通報システムとか、こういった活動を非常に活発にやっておられる。これは本当に強みだと思います。

また私も、もともと実家が商店街でもありましたので、商店街というのに非常に関心があるのですが、荒川区では古くからの商店街が、なお、かなりしっかりと根づいています。

それから、これは資料を見ていて気がついたのですが、荒川区は面積当たりの銭湯の数や八百屋の数なんか都内で一番多いんです。これは、お年寄りや色々な人々がコミュニティの中で自然に時間を過ごす空間がある、居場所があるということであり、とても大事なことではないかと思います。

荒川区には古くからのものが、割と自然な形で街なかに入り、それを大切にしている所

が大きな強みではないかと思います。「懐かしい未来」という言葉がありますが、伝統的なものをいかに生かしていくかということでも、荒川区の取り組みは非常に大きな意味を持っていると思います。

まずは基調講演への感想という形になりますが、私からのコメントとさせていただければと思います。

○阿久戸コーディネーター

ありがとうございました。

広井先生は、今年の8月18日の朝日新聞の朝刊で、人口減少という問題は大きな時の流れで考えていくべきではないかと述べられております。鎌倉時代に約800万人の日本の人口が江戸時代後半で3,000万人になって、明治維新以降、まるで大爆発が起きたように上昇を始めた。けれども、無理に無理を重ねてきた疲労や矛盾点が臨界点に達した結果が現在の人口減少となって表れているのではないか、ということでありました。

人口減少という現実の中で、どのように我々は生きていったらよいのか。そういう問題関心の中で、月尾先生のお話と深く通じるようにして受けとめさせていただいた次第でございます。ありがとうございます。

それでは次に、富田先生にコメントとご感想を含めてお願いしたいと思います。

富田先生はご承知の通りお医者様でいらっしゃいますけれども、お医者様の使命感から健康問題や命の尊厳の問題についてだけでなく、もっと大きな視野から、今後の荒川区や日本の今後の国政のことにも深いご関心と使命感を持っておられる先生です。

では、富田先生、どうぞ。

○富田氏



ただいまご紹介をいただきました荒川区医師会の富田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は一介の町医者の立場、それから、一区民の立場という

ことでお話をさせていただきますが、どうしても医療に携わる者は、病気のお話等々が多くなりまして、ネガティブな所見とかデータがたくさん出てまいりがちですが、今日ご来場の皆様方には逆転の発想でお聞きいただければありがたいと思います。

健康は幸福の根幹をなす条件の1つであり、様々な調査でも多くの人が幸福のためにはご本人やご家族の健康が一番大切であると答えています。また、荒川区政が目指しております理想の都市像の1つにも生涯健康都市が掲げられています。

生涯健康都市を実現するためのいくつかの重点プランの中に健康寿命の延伸と早世の減少があります。しかし、この2つについては、残念ながらあまりうまくいっておりません。

いっていないというところには、我々医師、かかりつけ医の側にも大いに責任があると思うのですが、この2つが、区民の幸福を考える上で、大きな課題かと思えます。

ちょっと話は飛びますが、昨年、日本の男性の平均寿命は80歳を超えました。80.2歳で世界第4位なのですが、女性はもちろん世界一で、86.61歳です。

しかし健康寿命、日常生活に何も支障がない、誰の世話にもならないという健康寿命が、意外と日本人は短い。男性が70.42歳、女性が73.62歳です。平均寿命と比較いたします

と、男性で9年、女性は13年もの乖離がありまして、その間は皆さん介護保険や医療費を使うわけですね。

荒川区では、健康寿命を長く延ばすために、糖尿病の対策を重点的に行っております。

昨年度は糖尿病重症化予防という事業が行われ、我々医師会もご協力申し上げました。43名の方に参加をいただいて、運動療法や食事療法、それから一般生活の指導等々、保健師さんや栄養士さんたちから6ヶ月間、徹底的に指導を受けてもらいました。その結果、かなりの人がいい成績をおさめました。

糖尿病というのは、ご存じのように、最後は糖尿病性腎症で透析に向かう方がかなり多く、医療費が膨大にかかります。医療費をできるだけ抑制しようということで糖尿病の重症化予防事業を行ったわけですが、こうした事業を行ったのは日本では広島県呉市が最初で、荒川区が全国で2番目です。まだ23区で着手しているところはございません。荒川区では今年も39の方に重症化予防対策の事業を行っています。

また、特定健康診査と特定保健指導というメタボリックな方に着目した活動も行っております。本年度の特定健康診査の受診率は、48.3%でした。近隣の色々な区の受診率を聞いてみますと、荒川区の受診率は結構高いのですが、問題は、その後の特定保健指導の実施率が9.9%であまりよろしくないことです。これも我々、努力をしていかななくてはならないだろうと思っております。

先ほどGAHの向上と地域のコミュニティの構築が不可欠だというお話が出ていましたけど、その辺に関しては、また後でお話をさせていただきますければと思います。

○阿久戸コーディネーター

ありがとうございました。

今日のテーマは「みんなでつくる幸せのまち」ということで、「みんな」とは誰か、それから「つくる」という実践的な課題が題に込められておりますが、これについては後ほど冨田先生に担っていただきたいと思います。

それでは、今回の荒川区民総幸福度向上の流れをつくり、その前提としての6つの柱を機軸とするところの基本構想を描き、そしてまた「幸せリーグ」を通して全国に荒川区の取り組みを広めて下さっている西川太一郎区長に、今日の月尾先生のお話へのコメントをよろしくお願いいたしますと思います。

○西川区長



月尾先生や広井先生には地方自治体が生には地方自治体が生が物を書いていくことがどんなに大事なことがあるのかといつも言っていたのですが、私は、生意気な言い方で恐縮ですが、それは当然のことだと思っています。

なぜかという、今日、会場におられる皆さんは、国民でいらっしゃるわけですが、同時に、東京都民でいらっしゃる。区民でいらっしゃる。つまり、1人の人間の中に矛盾がなく3つの機能が併存しているということを忘れてはならないと思うわけです。自治体に参加している人は、自治体オンリーの人であって、都政に参加している人は、何でもかんでも東京都のことをいつも見ている人で、国政に基礎自治体の人間が物を書いてはいけないみたいな、そういう既成概念は私には全く存在しないということを最初に申し上げさせて頂きたいと思っています。

私は区長に就任して以来、職員と一緒に、どのようにしたら区民の皆様に幸せを実感してもらえるようになるのだろうかと考えて参りました。どうすれば区民が幸せになれるのか。我々の考えを国や都に伝え、物を申していくためには、感覚的な話では通じなません。科学的に説明できなければいけないだろうと思って、区議会にお許しいただき、自治総合研究所をつくらせていただいた次第です。

自治総合研究所には二神先生の人脈で色々な専門分野の学者の方々に客員研究員としておいでいただいております。

今までに、幸福についての全体的な指標をつくりました。また、地域力について町会長さんたちとコラボレーションをして、地域力を強化し次世代に継承していくためには何が必要なかをまとめました。他にも、子どもの貧困の問題を取り上げ、教育や子育ての問題にも目を向けてきました。

こうした研究の成果もあり、荒川区の人口は、私が区長になったときは18万9千人（平成16年11月1日現在）でしたが、今は20万9千人（平成26年12月1日現在）になりました。荒川区は数少ない人口増加自治体でございます、このままいくと、2040年には21万8千人（日本創生会議（2014）「全国市町村別「20～39歳女性」の将来推計人口」）になると言われています。

もちろん、人口が増えたのは研究の成果だけでなく、今日ここにいらしていただいている区民の皆様のご尽力あつてのことです。

人口増加の理由の1つは、皆様に地域力を発揮して頂き、見守りや声かけ運動をして頂いていることです。よい意味でおせっかいなおじさん、おばさんが荒川区には残っていて、みんなを心配してくれているというのが1つのファクターになっています。

もう1つは、治安がとても良いことです。

見守りもあるからでしょうけれど、文京区、目黒区、荒川区はずっと治安の良好な御三家です。

最後に、富田先生から健康の問題についてご指摘がありましたが、私どもは若干ではありませんけれど、改善されているという自覚を持っています。

荒川区の平均寿命は、わずかではありますが伸びました。脳溢血や心臓病、生活習慣病を予防するために、女子栄養大学と組んで、また、まちの食堂にお願いして「あらかわ満点メニュー」を開発する等の取り組みを進めてまいりました。

それから、荒川区はジェネリック医薬品の利用促進を進めておりますが、富田先生のご協力で荒川区医師会に全面的なご協力をいただいております。

また、お話にありましたように、糖尿病の予防にも取り組んできております。その結果、荒川区では年間 7,200 万円の医療費を削減することが出来ました。

私は 1 兆円の医療費がかかっているオール東京の 75 歳以上の後期高齢者医療費の責任者でもあります。ここでもジェネリック医薬品の利用促進等の取り組みによって、薬剤費を中心に医療費を年間約 5 億円も削減することが出来ました。

私どもといたしましては、これまでに掲げた 6 つの都市像をしっかりと実現させるために、こうした努力を続け、これからも国や都に区の取り組みを発信していきたいと思っております。

今日の月尾先生のお話をうかがい、区民の皆様に良かったと思って頂けるよう、「幸福実感都市あらかわ」を築いていけるよう、一生懸命に努力を続けていこうという思いを改めて強くした次第です。

ありがとうございました。

○阿久戸コーディネーター

西川区長は、地域の経済発展にも積極的な取り組みをしておられますが、今日は同時に、福祉や健康、子育てといったことにもかなりきめ細かく触れていただきました。月尾先生のお話を受けとめてのご発言であったことと思います。

ここでもう一度、今日の月尾先生のメッセージを整理させていただきますと、経済発展一本やりが幸福につながるという GNP の時代から、もっときめ細かな幸福の向上に向けて GNH という概念が大切になる時代が来ているというご認識がまず出されました。

また、経済の成果の再分配の限界が見えてきているのではないかと。世界的にもジニ係数が上がってきており、日本でも格差が広がり始めた。これは国家の成熟度として非常に心配ではないかという現状認識が出されました。

こうした現状認識の下、日本の古来からある精神的な伝統・知恵の一つとして李御寧さんの『「縮み」志向の日本人』の中から縮み志向というお話をご紹介いただきまして、さらにはお茶のお手前を引用されながら、小さい中に集約された知恵の使い方、それからまた、素材を与えられたことに感謝するという精神の働きをご説明いただきました。

今こそ『老子』に云う「足るを知る」という日本の美点が出番ではないだろうか、とい



うお話を頂いたと受けとめた次第です。

成長一辺倒の時代であれば、成長ゆえにあらゆる矛盾が解消されるかもしれませんが、そういう時代ではないとするならば、どうやって日本の創生や地域回復について展望したらいいか。こうした点について、非常に重要なお示唆が与えられたと思っています。

広井先生、富田先生、西川区長の3名の方からのコメントを受けまして、ここでさらに補強したい、強調されたい点がありましたら、月尾先生より一言いただければと思います。

○月尾氏



色々ご指摘いただいたのですが、まずブータンのGNHという考え方がいかに画期的だったかということをご指摘しておきたいと思います。

国連は、2000年に開催された国連ミレニアム・サミットで採択された宣言をもとに、21世紀をどういう世界にしていくかの第一歩として2015年を達成期限にしたミレニアム開発目標というものをまとめました。現在は2015年以後の開発目標を策定するための議論が行われているのですが、2012年には「幸福に関するハイレベル会合」が開かれGNHを参考に新たな開発目標に幸福という視点を取り入れることが提言されました。

ヒマラヤ山脈の山麓にある人口70万人の小さな国の発想が、世界全体の目指す方向として示されたのは画期的なことだと思います。そういう意味で、荒川区がGAHや幸せリーグの取り組みを進めておられているのはすばらしいことです。

一方で最近のブータンを見ると、かつての

幸せ国家ではなくなりつつあります。

その原因ははっきりしているのですが、ブータンは1999年にテレビジョンとインターネットを、2003年には携帯電話の使用を解禁し、一種の情報鎖国状態を解きました。

私は3年前、ブータンの中でも一番奥地にある、600キロの道を丸三日間かけて行く僻地に行きました。十数件の家が谷間にある集落ですが、そこで目にしたのは、集落から若い人がいなくなっているという現実でした。

テレビジョンやインターネットを見て、世界にはこんなに良い所があるのかと思って、若い人たちが首都のティンブーに集まってきたのです。人口7万人の首都には大変な開発ブームが起きて、日本の昭和30年代のように、郊外に安いアパートが次々に建てられています。

それから、ある日本の雑誌記者が中学生ぐらいの若い女の子にインタビューして、「あなたの幸福に点数をつけると何点ですか」と質問すると「8点」という答えでした。「足りない2点は何か」と聞くと、「韓国に生まれたかったのにブータンに生まれてしまった」と言う答えです。テレビジョンが解禁になり、韓国が韓流ドラマを無料でブータンに送って、朝から晩まで放送されているので、それを見て、ブータンより韓国に生まれたほうが良かったというふうに思ったということです。

何も知らなくて幸福だった状態から、他国の生活と比べた途端に不幸になってしまったというわけです。

世界は完全な情報社会で、どのような情報でもすぐ手に入ります。その結果、例えば自分の持っている物よりも良いものがあると思ってしまうと満足できず、自分は貧しいと考えてしまう。これは人類の根本的な問題で、

世界の神話を調べると、どの神話にもそうしたことを戒める話があります。

知るということを止めることは出来ませんし、むしろ知った方が良いでしょうが、その情報を比べて、もっと上に行きたい、物質的に豊かになりたいと単純に思わないことが大切です。

広井先生が言われましたが、経済学の中に倫理学を取り入れるということが新しく始まりました。

アマルティア・センというインド生まれのアメリカにいる学者がノーベル経済学賞を受賞した時に評価された内容は、利益一筋に奔走する、つまり物質的な豊かさを競うような経済では社会は幸せにならない、倫理という歯止めをかけなければいけないと言ったことです。それから今年（平成 26 年）のノーベル経済学賞は、フランスの学者が受賞しましたが、この学者は大規模独占をいかに防ぐかという仕組みを考えたことが評価されて受賞したわけです。世界はこうした方向に向かっています。

私が区長や富田会長などをお願いしたいのは、物質的な豊かさを競うのではなく、幸せになるための社会をどのようにして築いていくか、これを荒川区から発信していただきたいということです。

○阿久戸コーディネーター

ありがとうございました。情報に触れて足らないことを嘆くのと、足ることを知るのとでは根本的に違ってくると思います。

ここで、今日のテーマに即しまして、幸福な地域社会とは何かということについて、あるいは地域力ということに関してでも結構ですけれども、広井先生からコメントをいただければと思います。

○広井氏



今、月尾先生から、ただひたすら欲望の拡大を目指すだけではいけないというお話がありましたが、学生と話をしてみますと、今の若者の間では、従来のような拡大成長の考え方よりもむしろ、地域とか地元とか、ローカルなものへの関心が非常に高まっているという印象を受けます。

自分が生まれ育ったまちを世界一住みやすいまちにしたいとか、優秀な学生が地域へと目を向けています。中央志向で拡大成長という方向ではなく、月尾先生がおっしゃられた「足るを知る」ような、地域にしっかり足をつけた上で色々な活動をしていこうとする姿勢が、今の若い世代からは感じられます。

阿久戸先生からのご質問につなげますと、こうした地域への関心は、若い世代だけでなく色々な世代の間で高まっているものだと思います。

これは私がよくする話なのですが、子どもと高齢者を足した人口が、日本では過去 50 年間、つまり高度成長期を通じて減り続けていたのですが、2000 年頃から曲がり角を迎えて、U 字カーブを描き始めています。子どもとお年寄りというのは、特に地域との関わりが強いので、「地域密着人口」と呼んでいるのですが、日本はこれから 50 年間、この地域密着人口が一貫して増える時代を迎え、人口構造的にも、地域というものの存在感が高まってくると言えます。

また、最近ではできるだけ職場と家が近いほうがいいという志向が強まっています。

それからもう一つ。ちょっと難しい言葉な

のですが、私の研究分野では「ソーシャル・キャピタル」、日本語にしますと「社会関係資本」という言葉がここ10年ぐらい非常に注目を浴びています。ソーシャル・キャピタルとは要するに人と人とのつながりのことです。

具体的には、先ほどの区長のお話にもつながりますけれども、例えばソーシャル・キャピタルがしっかりしている所、つまり地域のつながりがしっかりしている所では犯罪率が低い。それから、富田先生のお話につながりますが、ソーシャル・キャピタルがしっかりしている所では健康度も高くなる。単純な例でいうと、ひとり暮らしで家の中に閉じこもっていたりすると、どうしても心身の状況が悪くなるけれども、人とのつながりがあって、出かけたりする場所があると、当然、健康にも精神の状態にもプラスになるということです。ソーシャル・キャピタルは幸福度にも関係があると言われてしています。

このように、地域コミュニティという、これまであまり注目されていなかったものが、今、色々な状況から大きく注目されるようになってきています。荒川区のGAHの取り組みと地域力のお話はまさに重なってくるものではないかと思います。

○阿久戸コーディネーター

ありがとうございました。

血縁、地縁という言葉がございしますが、福祉や介護の問題を考えると、昔のような大家族がなくなっていく中で、血縁者だけで介護を行っていくというようなこれまでの在り方は難しくなっているかと思います。こうした状況の中で、健康問題、介護問題についても、地域力に対する期待が大きくなっているわけですが、この点につきまして富田先生から何かお言葉をいただければと思います。

○富田氏



GAHの向上に関して地域のコミュニティの再構築が必要不可欠であるということは皆さんの認識が一致する所だと思います。

先ほど見守りという話が出ましたが、我々は職業柄、看取りを扱いますので、終末期医療の問題にお話をちょっとシフトさせていただきたいと思います。

昭和20年代、30年代にかけては在宅で亡くなれる方が8割以上おられました。その後、病院志向が出てきて昭和51年になると在宅と病院の比率が逆転いたします。現在では病院で亡くなる方が8割以上です。

こうなりますと、まずベッドが足りない。それから、これから超高齢化社会で老人が多くなりますので、介護力も足りなくなってくるのが当然予想されます。

我々医療関係者の力だけでは看取り、終末期医療というものを解決できなくなってくる時が来ると私は思っておりまして、つまり、地域の皆さんの力を、また行政の力を借りることが必要不可欠になると思っております。

色々な病氣がありますので、最期を迎える場所の希望にも色々あります。

例えば、がんの末期ですと、アンケートでも出ているのですが、あなたは最後まで看取られたいですかと聞くと、病院でとおっしゃる。例えば肺がんでは、呼吸の管理も必要になるなど医療関連の行為が必然的に多くなりますからこれは当然です。

また認知症などでは、介護力が問題になってきますので、私は介護施設で最後を看取って欲しいという方も多くなっています。

もちろん、私は荒川という素晴らしい地域で生活してきたのだから、そこで最期を迎えたい、家族に見守られて家で看取られたいというのも、昔からありましたように、当然の話です。

昨日の新聞報道でも、大都市の病床不足が問題になっていましたし、介護施設も当然足りなくなってくるということで、都会の人は、変な言い方ですけど、死に場所を求めて地方に行くと言います。あるいは、その前の話として、例えば長野県の佐久市とか、千葉県の鴨川市などでは、病院をつくって10万人都市にしようという動きがあると聞いたことがあります。

我々地域の皆で終末期の医療を考える時代に来ているのではないかと考えております。

○阿久戸コーディネーター

冒頭に西川区長がおっしゃられた政策の1つに、おせっかいおじさん、おばさん運動というものがありました。血縁を越えて、地域全体で見守りを行っていくこうした活動は、何より住民の方々の大きな力、地域力があってのことだと思います。

荒川区が持っている素晴らしい力である地域力の更なる向上について、西川区長からメッセージをいただければと思います。

○西川区長



まず高齢者の見守りに限定して申し上げますと、荒川区のある中小企業の経営者が「ネットミル」というものを発明いたしました。これは、非常に簡単に設置できる機械で、ご家庭

の電気のメーターの所に置いておきますと、1日の電気の波形、おじいちゃん、おばあちゃんが朝起きて、電気をつける、冷蔵庫をあけるというようなことが記録される。

この1日の電気の波形は大体決まっているので、それが突然乱れると何かあったということで、ネットミルがセンターに通報します。センターの情報を区役所もきちっと把握して、職員が自転車に乗ってそこに行くとか、場合によっては町会長さんに、近所の何々さんのお宅が普通と違うということ、見ていただけないですかと区民生活部からご連絡申し上げたりしています。実際に行ってみたら、おじいちゃんがへたり込んでいたり、おばあちゃんがおろおろしていたりというようなことがありました。

また荒川区では、新聞配達の方々にも見守り活動へのご協力をお願いしております。新聞が2日ぐらいポストから取られていない時には中の様子を見てもらうということを警察にも認めて頂き、活動を進めている所です。

見守り活動については、町会組織の方々、また新聞配達の方など、様々な方から大きなご協力を頂き、非常にこまめな対応をいただいております。荒川区の売りは見守りであり、そのベースが120の町会であり、地域力であるということが言えるかと思います。

また、先ほどの広井先生のお話の中で、子どもや若者の話がありました。

荒川区と自治総合研究所は、国内でもいち早く子どもの貧困の問題を取り上げ、対策に取り組んでまいりました。

また若者支援も進めております。

例えば、荒川区が若者の雇用の為に実施している「青年社会貢献活動認証制度」について、色々な方から大変なお褒めの言葉を頂戴いたしました。

青年社会貢献活動認証制度という名前です

と仰々しいので、もう少し気軽な名前にしようと思っていますが、この制度は社会のために貢献してくれている青年を褒めるというものです。しかも、ただ褒めるというだけではなくて、商工会議所にもお願いして、認証状や認証証明書を発行して就職に有利になるよう支援する仕組みになっています。この制度のおかげで就職に成功したという青年が少しずつ増えています。

ボーイスカウトやガールスカウトで「たか章」とか「富士章」を受章した青年や、消防団に加わってその仲間を増やしてくれている大学院生とか、そういう社会のために貢献しようという青年を、企業も社会も一緒になって支援していく、こういう仕組みが大切だと思います。

それから、東京 23 区は、アジア、例えばマレーシア、インドネシア、カザフスタン、ベトナムはもとより、遠くブラジルまで、視察の受け入れや市民同士の交流など、清掃事業による国際協力を行っています。私が今、23 区の清掃事業の責任者もしておりますから、リサイクルの思想をアジアに広め、地球温暖化を防ぐための努力を我々一生懸命やっています。

また、地方から物を申すというのは、全国から基礎自治体が集まって結成された「幸せリーグ」の役割の 1 つだろうと思っています。

先ほど申し忘れましたが、人が幸せになるためには、また、生きがいを感じるためには、地域のことに参加していくことが一番大切だという研究もあるようでございます。これまで役所主導でやってきたことが富田先生のご発案で、区民の皆様の主導に変わりつつあります。

また、今日お見えの町会長の皆様をはじめ、商工会議所や民生委員、保護司、青少年委員など、本当に色々な団体の方々に、荒川区は

住む人が幸せになることを目指しているまちだという認識をだんだんとですがお持ち頂けるようになってきたのではないかと身勝手にも思っております。

ぜひ皆様と共に、幸せなまちを築いていくことができればと思っております。

○阿久戸コーディネーター

本当に共感を持って伺いました。ありがとうございました。

幸福を目指すブータンの取り組みを区長にお示しになり、幸福を指針とした区政運営についてのご指導をなされて参りましたのは月尾先生かと思います。今、西川区長のお話を受けていただいて、何かご助言やご感想があれば、よろしくお願いします。

○月尾氏

私がブータンへ行き、当時のティンレー首相にインタビューした時、「幸福な国家をつくるという目標は分かりましたが、具体的にどういう方法で実現されるのですか」と尋ねましたら、明確な答えが返ってきました。

「ブータンは現在でも大家族制度が維持されている」。

実際、ブータンでは、3 世代、多いところは 4 世代が一緒に住んでいます。

「この家族がお互いに助け合って幸せな生活をしている。それを周辺の人に広げてお互いに助け合っていくようにする。さらに地域へ広げ、そして国全体へと広げていく」ということでした。

基本は家族が助け合って幸せな生活をする



というところにあり、それを国にまで広げていくのが、ブータンの基本的な政策だということです。

まさに西川区長が進めておられることはそういうことなのだと思います。

阿久戸先生も言われましたが、血縁から始まり、地縁に行き、そこで国を変えていくというような流れでいくのが今、可能な方法だと思います。

しかし残念ながら大都会というのは、荒川区は別だとは思いますが、ほとんどが地縁や血縁ではできていないのです。何でできているかというと、職場の縁、つまり職縁でできている。

会社の同僚のことはお互いに非常によく知っている。例えば、上司の家庭に問題があるということはよく知っているが、都会の高層アパートに住んでいると、隣の家ことは、どういう人が生活しているかも知らない。つまり、地縁はほとんどなくて、職縁が社会を維持しているというのが都会です。

だから、西川区長が言われるように、まず地縁のある地域社会を築き、その社会を日本各地へと広めていくことが大切です。幸せリーグをはじめとする活動が動けば、地域が日本を変えていく大きな力になるのではないかと考えています。

○阿久戸コーディネーター

ありがとうございました。

広井先生、こういうシンポジウムが国の諮問会議などではなく、基礎自治体である荒川区が主催して開催されているということには、とても大きな意味があると思います。国と地方自治の役割に関して、地域力の問題と絡めてコメントをいただければと思います。

○広井氏

月尾先生がおっしゃられたとおりで、大都会が職縁中心というのは、まさにその通りだと思います。首都圏全体がそうだと思います。そういう中で、荒川区は地縁的な部分が町会の活動を含めて非常にしっかりしている。これはすばらしいと思います。

地域コミュニティを国政との関係も含めてどういう風に強めていくか。その直接の答えにはならないと思うのですが、伝統的な古くからあるものと、NPOのような新しいものが連携してやっていくような姿が一つ考えられないのかなと思っています。

実は先週、大学のゼミで学生に教えてもらったのですが、「千住すみだ川」というNPOがあって、学生の話では「隅田川妖怪絵巻」という千住を中心としたいろんな地域の妖怪を絵にしていこうといった活動をやっているそうです。要するに、地域に埋もれている伝統や文化を再発見していこうという活動をしていらっしゃるわけですが、隅田川妖怪絵巻では、このNPOは筑波大の方と協力しながら活動を行っているということです。

このように外部の方と一緒に活動を行うこと、例えばNPOと町会がうまく連携して活動をしていくということが、今後、重要になるのではないかと考えています。

また、国との関係では、まず従来の中央集権的な仕組みが機能しなくなっていることを踏まえておく必要があると思います。



中央集権的な仕組みが機能しなくなっている理由として、高度成長期のような工業化社会から、現代は工業化を経た後のポスト工業化社会へと経済構造自体が変わってきていることが挙げられると私は思っています。

月尾先生のお話とも関連しますが、工業化社会というのは、例えば鉄道を引くにしても、道路を敷設するにしても、大体国レベルの空間的な広がりを持っていることが多いわけです。ですから、中央でプランニングするというのがそれなりの合理性を持ってくる。

ところがポスト工業化社会、つまり工業化を経た現代のような社会になると、人々の関心は、福祉や医療、環境や、まちづくり等に向いていくことになります。そういった領域というのは、どれもローカルな、地域に密着したものであるわけです。そうすると、まさに問題の解決というのはローカルな視点から考えていくことが必要になります。

そういう意味では、あくまでローカルから出発して、ナショナルという方向へと考えていかないと上手くいきません。現代はそういう状況になっていると思います。

○阿久戸コーディネーター

区長、どうぞ。

○西川区長

今ご紹介のあった「千住すみだ川」というNPOは、地元の床屋さんが首唱されて始まりまして、地元の区立中学校の校長先生が南千住検定というものを作り、南千住に住んでいる人たちが南千住のことをどれだけ知っているかの試験もされておられます。

町会長さんたちからも南千住検定を受けたよ、というお話を聞いておりまして、合格した方が多かったということですけど、私なんか全然歯が立たなくて途中であきらめました。

荒川区の歴史を大切にしておささり、また色々な人にそれを広めて下さっている方がいるというのは、荒川区の伝統・文化を考えていく上でとても重要なことだと思います。

区も、松尾芭蕉が荒川区から旅に出たということを全面的に承認してもらうキャンペーンを2年がかりでやってきたのですが、いよいよ認められて、芭蕉が出発したと言われている神社のお祭りが今度NHKで全国的に放映されます。

荒川区の文化は誇るべきものです。小林一茶もいたし、西山宗因の碑もあるし、夏目漱石も来たことがあるし、正岡子規と高浜虚子が吟行した。金子兜太翁によってつくられた俳句に、「荒川千住芭蕉主従に花の春」という俳句があります。金子翁に芭蕉は荒川から出たという確固たる証拠は何かありますかと尋ねましたら、しばらく考えていて、私は見たと、こうおっしゃいました。このお話につきましては、詳しくはお正月の「新春区長対談*」をご覧くださいませ。

幸せからちょっと離れましたけど、区民がプライドを持って暮らしていける、地域のことに貢献していることに生きがいを感じる、私はそれこそ荒川区のハピネス、うれしさであるという風に思っております。

*「こんにちは荒川区」の新年特別番組「新春区長対談」の様子は荒川区役所webサイト (<http://www.city.arakawa.tokyo.jp/>) および「あらかわ区報」平成27年1月1日号でご覧になることができます。

○阿久戸コーディネーター

富田先生、地域力ということに関して、色々な課題が見えてきましたけれども、世代継承という点について、何かメッセージをいただければと思います。

○富田氏

今、南千住のNPOのお話がありましたけど、荒川区に生まれ育った子どもたちが、荒川区の歴史を知ることによって郷土愛を持ち、将来も荒川に住みたいと思ってくれるということは、非常に大事なことだと思います。

私もGAH推進リーダー会議の場では、お子さんにもGAHを享受する権利が当然あるということを申し上げて参りました。

ちょっと余分な話で申しわけないのですが、今、インフルエンザがはやり出しました。

新型インフルエンザも含めて、今、3,000万人分のワクチンの備蓄があります。心臓や肺に病気のある方、妊婦の方々に勝るとも劣らないくらい、お子さんの接種を優先していただきたいというのが私の意見です。

と申しますのは、お子さんのインフルエンザの予防接種をやりますと、これはエビデンスなのですが、必然的に高齢者の死亡率が減るのだそうです。これは間接的なインフェクシャス・プリベンション（感染予防）です。

一方、高齢者のインフルエンザの直接接種をどれだけやっても、高齢者自身の死亡率はあまり変わらないというデータがあります。

ワクチンのお話は1つの例ですが、明日の日本を背負って立つ子どもたちのために行動することが、結果として我々大人のためにもなるのではないかと感じている次第です。



○阿久戸コーディネーター



ありがとうございました。

それではここで、これまでの話を私なりにまとめさせていただきます。

まず、時代の認識ということですが、資源をどんど

ん使いつぶして経済を拡大していくという流れが地球的規模で劇的に変わりつつある。むしろ限られた資産、限られた予算をどう用いていくかという成熟社会ということへの転換が望まれているのでないだろうかということですね。

それから少子高齢化、特に出生率の低下については、今、荒川区は転入して来る人が多いわけですが、国全体としては、少子高齢化ということを感じて対策を立てる必要があるということかと思います。

こういう歴史認識を踏まえた上で、「みんなで作る幸せのまち」という今日のテーマについて考えてみたいと思います。

「みんな」ということについては月尾先生がおっしゃられたように、地縁・血縁というものが都会では次第に機能しなくなりつつあります。ですから、地縁的なつながりを広め深めていくとともに、職縁によって地縁・血縁社会の欠けを補い、立て直していくことも必要となるのではないのでしょうか。

西川区長は、基本構想を立てるときに、屋間区民も荒川区の基本構想に主体として関与していただくとおっしゃられておりました。これはまさに職縁の発想だと思います。

昼間のほとんどを荒川区で暮らし、よいお仕事をしておられる方々も「幸せのまち」づくりの視野に入れねばなりません。それが「み

んな」の意味であると思います。

2 番目に「つくる」ということです。何を、どのようにつくるのか。これについては、地域を、一人一人が幸せを実感できるようにつくっていくということになるかと思います。

ただ受け取るばかりでは幸福感の向上には決してつながらないと思います。人間の幸福というのは、地域に貢献するということを通して最も良く向上するのではないのでしょうか。

地域力というのは絆です。「人間」という字は、間に生きる人という意味でもありますけれども、共同体、協力体制をつくりながら進めていくところに地域力が生まれるのであって、その意味で町会や商店街、NPO や荒川区職員の方々のお働きは、非常に大きい意味があると思います。

そして3 番目に「幸せ」の意味ですが、既に申し上げましたように、地域力を形成していくこと自体が、まさに幸せの実感につながっていきます。大変な情報社会となった日本ですけれども、ほかとの比較において慢性的に不満足を知るのではなくて、足りることを知る。足りることを知ることを通して、与えられている地域の良さに気付き、感謝を持っていくということが大切になるかと思

ます。

一層の幸せのために、子どもたちの将来を考え、ご年配の方々と若い世代との世代交流を考える。また、自死を少しでも抑制するためには、話をよく聞くということが大切であると言われます。話をよく聞くということは、あるいは、健康問題にも通じることかもしれません。こういった何気ない活動が幸せ実感の向上につながるのではないのでしょうか。

最後4 番目に、「まち」ということですが、けれども、広井先生と私がやりとりさせていただき、また西川区長もおっしゃられたように、これは国家の主催するシンポジウムではありません。基礎自治体が主催して呼びかけしているシンポジウムです。まさにこのことが非常に重要な意味をもっています。

これからはローカリゼーション、あるいはローカルということが非常に大事になってくると言われますが、それは、住民と一番力を合わせやすいのはまさにローカルな基礎自治体であるからこそです。

助け合いながら、共に立ち上がっていく。その意味で GAH の取り組みは、単に荒川区だけでなく、広井先生のお言葉をお借りすれば、歴史的な画期的意義があるのではないかと思います。

会場の皆様からの声

パネルディスカッションの最後には会場との質疑応答の時間が設けられました。その一部をご紹介します。

- 「色々教えていただきありがとうございました。私にとって幸福は、まず家族が健康であることです」
- 「マンションなどでは、自治会等で連絡を取り合うなどがあまりないようです。そうすると、どここのおばあちゃんの具合が悪くなったといった地域の情報が伝わらず大変かなと思いました」
- 「GAH に大変興味を持っています。これを区の政策に繋げていくには、区民アンケートの結果を地域別や年代別等で詳細に分析し、何を第一に行うかを考えていく必要があるのではないのでしょうか」
- 「GAH の観点から障がい者のグループホームを増やすという話を聞きました。詳しく知りたいです」

「幸せリーグ」実務者会議

平成 27 年 1 月 30 日から 2 月 6 日にかけて平成 26 年度「幸せリーグ」第 5 回実務者会議が荒川区役所で開催されました。

実務者会議では、参加自治体の実務者が「幸福度調査①」「幸福度調査②」「幸福度活用」「町おこし」「定住人口増加」の 5 つのグループに分かれ、各自治体のこれまでの取り組みや幸せリーグ参加自治体へのアンケート調査等を踏まえた活発な議論を交しています。



▲第 5 回実務者会議（幸福度活用グループ）

報告書の有償頒布・閲覧について

○ 荒川区自治総合研究所（RILAC）では研究報告書の電子版を研究所 web サイト（rilac.or.jp）で無償公開しております。また、各報告書は以下の場所で閲覧することができます。

- ・ 区立図書館・区民事務所
- ・ 荒川区役所情報提供コーナー（荒川区役所本庁舎 2 階）
- ・ 公益財団法人荒川区自治総合研究所（荒川区役所北庁舎 3 階）

○ 製本版の有償頒布も行っております（製本版と電子版の内容は同じです）。

- ・ 『親なき後の支援に関する研究プロジェクト報告書』
(平成 26 年 7 月) 価格 1 冊 310 円
- ・ 『荒川区民総幸福度（GAH）に関する研究プロジェクト第二次中間報告書』
(平成 24 年 8 月) 価格 1 冊 380 円
- ・ 『荒川区民総幸福度（GAH）に関する研究プロジェクト中間報告書』
(平成 23 年 8 月) 価格 1 冊 250 円
- ・ 『子どもの貧困・社会排除問題研究プロジェクト最終報告書』
(平成 23 年 8 月) 価格 1 冊 250 円



※ 郵送の場合は別途送料がかかります。

RILAC ライブラリー 全国の書店で絶賛発売中！

『あたたかい地域社会を築くための指標』

（第 2 版 平成 22 年 5 月）定価：本体 667 円＋税

『子どもの未来を守る』

（平成 23 年 11 月）定価：本体 800 円＋税

『地域力の時代』

（平成 24 年 9 月）定価：本体 800 円＋税



RILAC NEWS No.14 （平成 27 年 3 月発行）

編集・発行 公益財団法人荒川区自治総合研究所（RILAC）

住 所：荒川区荒川 2-11-1 TEL：03-3802-4861 FAX：03-3802-2592

URL：http://www.rilac.or.jp/ メール：info@rilac.or.jp